町民文芸

只見短歌会　令和七年十二月詠草

春迄と言ひ聞かす如雪中に切干し用の大根寝かす　目黒　富子

青空に白き浮き雲天高し移りゆく秋地に黄金波　関谷登美子

初雪に声あげ跳ねし三歳児白きを追ひて朝ひらけたり　立花　奏音

朝の日の冬至近くに差し込めば窓から長く部屋の奥まで　新国由紀子

雑然と並びし書類けふもまた後であとでと重ねゆく日々　渡部ヨリ子

只見俳句会　十二月定例会

正月のしつらえ変えて去年今年（こぞことし）　味代子

老いが耳いわず聴かずの小春かな　一恵

足裏に踏みし初雪嬉し憂（う）し　礼

若き日の映画を漁る夜長かな　真理子

水澄めり小堀り払いの村普請　修一

しみじみと母似と思う掌のぬくみ　信

クリスマス弾む胸押さえる八十才　睦子

換気扇弱の音聞きいつまでも　都

足早の挨拶交わす冬の暮　恒夫

冬の朝声高らかに通学児　雨粒の光る菊葉も今朝の冬

豪雪の記憶も遠くなりにけり　冬の暮れ遊びし子等は早々と

六才児お口もぐもぐ冬木立　神おわす小さき村に銀杏散る

今はもう住む人なしの冬支度　立冬や二人暮らしに沓（くつ）あまた